



War Cry

7月号

福音版
2026
July
No.2908

二〇二六年 七月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行 広報版・奇数月十五日発行

GOOD NEWS
とぎのこえ

光へと招くキリスト

立石 真崇

光の届かないところでずっと生きていた人がいました。本人も周囲もその状況を変えることはできませんでした。しかし、イエス・キリストは、その人に全く新しい人生を開かれました（ヨハネによる福音書9章）。

その人は、生まれつき目が見えず、人々から施しを受けていました。彼を見た人は、「こうなったのは誰のせいか」と問いました。人々の問いは善意や同情から出されたものでしたが、かえって彼を問題を抱える存在と決めてしまい、解決の望みのない人生に閉じ込めてしまっていました。

しかし、イエス・キリストは違いました。キリストは彼の人生を批評せず、「神の業がこの人に現れるため」であると語られました（3節）。キリストによって、彼の人生は、神が開かれる新しい将来に結び合わされたのです。

キリストはあえて、彼の目に手で触れられませんでした。そして、池に行って目を洗うようにと言われました。キリストは、彼が長いあいだ抱えていた孤独や痛みそのものに触れられました。それとともに、ご自

分を信頼して立ち上がるように、と呼びかけられたのです。その呼びかけに応えて立ち上がった時、彼の目は見えるようになりました。キリストの呼びかける言葉が、新しい光となって彼の人生に差し込みました。キリストによって、彼は神の愛のうちに自分を信じだしました。

このお方が、今も、すべての人を照らす「世の光」として、私たちにも向かい合われます。

「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」（ヨハネによる福音書8章12節）

今の私たちも、「どうして」という問いをさまざまなかたちで抱えます。自身について、家族や周囲の人たちについて、学校や仕事について、日々の暮らしや社会について、くりかえし生まれる「どうして」という問いは、将来を見る目をふさぎ、人を孤独の迷路に閉じ込めます。神も、隣人も、自分をも見失う罪の闇が覆いかぶさろうとします。しかしキリストは、そのような私たちを愛のま

なざしで探し出し、回復と希望を与えてくださいます。その愛の極みがキリストの十字架に表れています。キリストは十字架の死によって私たちの罪を担い、私たちを罪の闇から神の光のもとへ連れ戻してくださるのです。

今年七月、救世軍は創立百六十一周年を迎えます。創立者ウィリアム・ブリスは、イギリス・東ロンドンの都会の片隅で顧みられずにいた人々のもとへ行き、イエス・キリストの愛のまなざしと新しい人生の希望を伝えました。今日、救世軍の働きは世界に広がっています。その働きの土台には、今も同じキリストの招きがあります。

キリストはあなたを見つけておられます。そして、新しい光の中で生きるようにと招いておられます。どうぞ日曜日にはお近くの救世軍の小隊（教会にあたる）、あるいはキリスト教会へお出かけください。自分の人生が、神の業が現れるものとなるという幸いを受け取っていたきたいと、心からお祈りし、お勧めいたします。（救世軍士官〔伝道者〕）



恵みに感謝し、与えられた日々を喜んで生きる

クラリネット奏者 今村 純子 さん

プロフィール

武蔵野音楽大学器楽科クラリネット専攻卒業。ユーオーディア・アカデミークラリネット専門コース卒業。クラリネットを小林聡、兼氏康雄、谷尻忍、柳瀬洋の各氏に師事。オーケストラ、アンサンブル、各種イベント等で活躍中。現在、後進の指導にも力を入れ、数々の受賞等の成果をあげている。クラリネットアンサンブルカペレ、L'aura、CLUT クラリネットアンサンブルメンバー。震災復興チャリティーコンサートにも力を入れている。ユーオーディア管弦楽団クラリネット奏者。聖書キリスト教会東京教会所属。

生い立ち

温かな音色を奏でるクラリネット——吹奏楽でも花形の楽器です。クラリネット奏者の今村純子さん、各地の教会や演奏会場でのコンサートで活躍しています。喜びあふれる演奏を続ける今村さんの、これまでの歩みを通しての証言です。

私は小さい頃から、両親と共に教会に通って育ちました。けれども、幼い頃からいつも神様を意識していたというより、最初は、ただ親について行っていた、という感覚に近かったと思います。私が幼い頃、自分が死んだらどうなるのかということを怖がって、母に尋ねたことが、両親が教会に通うきっかけのひとつだったと聞いています。

音楽の道への導き

私のはっきりと信仰を告白したのは、小学生の頃に参加した教会のバイブルキャンプの時でした。それまでも何度も聞かされていた聖書の話が、その時、初めて自分のこととして心に響きました。

人は生まれながらにして罪があること、イエス・キリストが神の御子であり、罪のない方であるにもかかわらず、私たちの罪のため、

私の罪のために十字架にかかってくださったこと、そして三日目によりがえられたこと、その方を信じて受け入れるなら、罪を赦され、神様と共に永遠に生きる者とされる、ということを知り、祈りをもって信仰を告白しました。

なければならぬ曲がなく、なつたことを寂しく感じ、これからもクラリネットを続けていきたいと思いました。当時は音楽とは関係のない進路を考えていたため、音大への進路変更は大きな決断でした。だからこそ、神様からの確かな導きがなければ進めなれないと思い、何日も祈り、聖書を読みました。その中で、まず

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです」(ピリピ人への手紙2章13節)

という聖書の言葉(教会では御言葉と呼ばれます)が与えられました。

それでも疑い深い私は、さらに確信を求めて祈りました。すると次に、賛美に関するある御言葉が与えられました。それでもなお、もう一度背中を押していた

リスチャン音楽家の集まり)の案内が載っていたのです。自分が正しい者だとは思えませんが、神様の愛を知らされている私がやらなくて誰がやるのだろうか、という思いが与えられました。

後になって知ったのですが、ユーオーディアで掲げられる聖書の箇所は毎年異なるものでした。その中で、その時に与えられた御言葉と全く同じ箇所が記されていたことに、後からも、あらためて神様の導きを強く感じました。

私は神様に背中を押されたように感じ、音楽の道に進む決心をしました。その時に案内を目にしたユーオーディアの働きにも、後に加えられることになりました。

大学を卒業し、結婚してからは、夫と共に歩む日々が与えられました。

夫は音楽家ではありませんでしたが、元力士で体格が良かったからか、歌がとても上手でした。夫とは、交際期間も含めると二十年ほどの年月を一緒に過ごし

暗く冷たい場所
落ちるような時を経て

ましたが、数年前、病気で亡くなりました。

その時、私は、ただただ暗く冷たい場所にひとり落とされたような感覚でした。そのような中で、ユーオーディアオーケストラと合唱団の演奏会で、「フットプリンツ（あしあと）」という曲を演奏する機会がありました。この曲は、「あしあと」という詩をもとに作られています。

その詩は、ある人が夢の中で、主（神様）と共に砂浜を歩いている、という場面から始まります。振り返ると、人生のさまざまな場面に、二人分の足跡が残されていました。ところが、人生で最もつらく悲しい時には、一つの足跡しかなかった。なぜその時、あなたは共にいてくださらなかったのですか、とその人が主に尋ねると、主は「その時わたしはあなたを背負って歩いていたのだ」と語られるのです。

それまでも何度かこの曲を演奏したことがあり、そのたびに心を動かされていました。この時は特に、自分の状況と重なって、ああ、本当にそうだ、私はひとりではなかったのだ、と

心に強く響きました。

その後、その演奏会がテレビ番組で紹介され、その中で一つの聖書の言葉が語られていました。

「あなたがたが年をとつても、わたしは同じようにする。あなたがたがしがらになつても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負つて、救い出そう。」（イザヤ書46章4節）

この言葉を聞いた時、私はとても深い慰めを受けました。私は大人としてすっかりしなけりばいけないと思つていましたが、私が年をとつても、神様は変わらずに私を支え、背負ってくださいののだと知り、大きな安心が与えられました。

夫を失った寂しさは今もあります。しかしその中でも、神様が共にいてくださるといふ確か

な希望が与えられています。

振り返ってみると、あの暗く冷たい場所に落とされたように感じた時、私が立つて歩いているように見えていたとしても、実際には神様に支えられ、運ばれていたのだと思います。

恵みに感謝し、 喜んで生きる

私にとって演奏することは、何か特別に立派なことをしようとするのではなく、ありのまま。神様からいただいた恵みに感謝しながら、

音楽そのものを楽しんで演奏すること、そのこと自体が、私にとっての賛美なのだと思います。

そして賛美は、音楽だけに限られたものでもないと思つています。日々の中で神様を思い、感謝し、与えられた歩みを喜んで生きることもまた、主への賛美なのだと思います。

これからも、どのような時にも共にいてくださる神様の愛を覚えながら、与えられた歩みの中で主を賛美し、



その恵みをお伝えしていきたいと願っています。私の歩みも音楽も、神様の御心のうちに用いていただければ幸いです。

「息のあるものはみな、主をほめたたえよ。ハレルヤ。」（詩篇150篇6節）

あしあと

ある夜、わたしは夢を見た。

わたしは、主とともに、なぎさを歩いていた。

暗い夜空に、これまでのわたしの人生が映し出された。

どの光景にも、砂の上にふたりのあしあとが残されていた。

一つはわたしのあしあと、もう一つは主のあしあとであった。

これまでの人生の最後の光景が映し出されたとき、

わたしは、砂の上のあしあとに目を留めた。

そこには一つのあしあとしかなかった。

わたしの人生でいちばんつらく、悲しい時だった。

このことがいつもわたしの心を乱していたので、

わたしはその悩みについて主にお尋ねした。

「主よ。わたしがあなたに従うと決心したとき、あなたは、すべての道において、わたしとともに歩み、わたしと語り合ってくださいと約束されました。それなのに、わたしの人生のいちばんつらい時、ひとりのあしあとしかなかったのです。いちばんあなたを必要としたときに、あなたが、なぜ、わたしを捨てられたのか、わたしにはわかりません。」

主は、ささやかれた。

「わたしの大切な子よ。わたしは、あなたを愛している。あなたを決して捨てたりはしない。ましてや、苦しみや試みの時に。あしあとがひとつだったとき、わたしはあなたを背負って歩いていた。」



マーガレット・F・パワーズ / 著、松代恵美 / 訳『あしあと 〈Foodprints〉』
太平洋放送協会（PBA）発行から転載





世界をみつめて

〈アンゴラ〉洪水被災地支援

アフリカ南西部に位置するアンゴラ共和国のベンゲラ州では、4月5日から12日、大雨による深刻な洪水が発生しました。被害は広範囲に及び、住む場所や家財を失った人々は約3,000世帯にのぼると推定されています。アンゴラの救世軍の緊急支援チームは、4月14日から20日にかけて被災地に向かい、3,000人以上の人々の避難所となっていたオンバカ・スタジアムを中心に活動しました。食料、衛生用品、衣類、その他の生活必需品を1,235人に配布し、屋外で寝泊まりしている人々には温かい飲み物を届けました。また、被災した家族のニーズを把握するため戸別訪問をおこない、精神的・霊的なサポートにもあたりました。

これらの支援は多くの人々にとって、まさに必要な時に届けられました。6人の子どもをもつシングルマザーのチカ・ガベラさんは、子どもたちと屋外で寝泊まりしていた時に、食料、マットレス、衛生用品、そしてテントを受け取ったことに感謝を表しました。



こうした取り組みを通して、救世軍は緊急の物質的なニーズを満たすだけでなく、危機的状況にある地域社会と連帯することを目指しています。これらの支援活動は、提携団体及び救世軍国際本部の緊急災害対策チームとの協力によっておこなわれています。引き続き、被災した方々のために祈りを献げつつ活動していきます。



〈国際本部〉現代奴隷制・人身取引対策の年次報告書発行

5月、救世軍は、現代奴隷制及び人身取引対策(MSHTR)に関する2025年の年次報告書を発行しました。救世軍は国際的なネットワークを通して、

現代奴隷制や人身取引の被害に遭った人々が生活を取り戻し、尊厳を回復することができるよう支援をおこなっています。2025年版の報告書は「希望への歩み」と題し、困難な経験から回復した人々の声や、世界各地での取り組みを紹介することで、変化は可能であり、人生は再建できるというメッセージを伝えています。

「現代奴隷制」とは、人身取引、強制労働、債務奴隷、強制結婚、性的搾取などを包括する用語であり、世界的に最も差し迫った人権問題の一つです。救世軍のMSHTRに関する行動枠組みは、祈り、予防、保護、パートナーシップ、参加、訴追、証拠、政策という8つの分野から構成されており、この問題への包括的なアプローチを示しています。救世軍は、その国際的なネットワークが「世界的なセーフティネット」として機能し、国境を越えて被害者が安全に帰国し、尊厳ある生活を再建できるよう支援し続けることを表明し、人々が最も助けを必要としている時に手を差し伸べることで、私たちは共にこの世界に変化をもたらすことができる、と述べています。



↑報告書ダウンロードページ(英語)



救世軍とは? What is the Salvation Army?

救世軍は、英国ロンドンに国際本部をおくプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースが、東ロンドンのホワイトチャペル街で伝道集會を指揮した7月2日が、創立記念日となっています。当時の英国は産業革命により貧困などの社会問題が発生し、東ロンドンには社会から疎外された貧しい人々が集まっていました。ブースはその人々に向かい、食事の必要な人には食事を、住む家のない人には清潔な家や仕事を提供し、魂の救いのため聖書のメッセージを伝えました。働きは発展し、1878年には「The Salvation Army」(救世軍)の名称が生まれ、英国のみならず世界各地へと急速に広まっていきました。



最初の伝道集會

日本では1895(明治28)年に活動が始まり、現在、各地の小隊(教会にあたる)での伝道、病院と社会福祉施設を通しての働きを進めています。

☆『キッズ・ゴスペル』コーナー☆ (子ども向け紙面)

左のQRコードから、今月の『キッズ・ゴスペル』を閲覧できます! 聖書のお話も動画で見られます。ぜひ、ご覧ください!



救世軍公報 ときのこえ

発行日 福音版 / 毎月1日、広報版 / 奇数月15日
定価 福音版 / 1部40円、広報版 / 1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号) / 1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 西村 保
編集人 平本 祐子
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 有限会社コーチ印刷



聖書は新共同訳を使用しています © 共同訳聖書実行委員会 © 日本聖書協会 救世軍は、旧統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の中から該当する項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。

- ・私の近くの救世軍を紹介してください。
- ・キリスト教についてもっと知りたいです。
- ・『ときのこえ』の購読を申し込みます。
- ・相談を希望します。